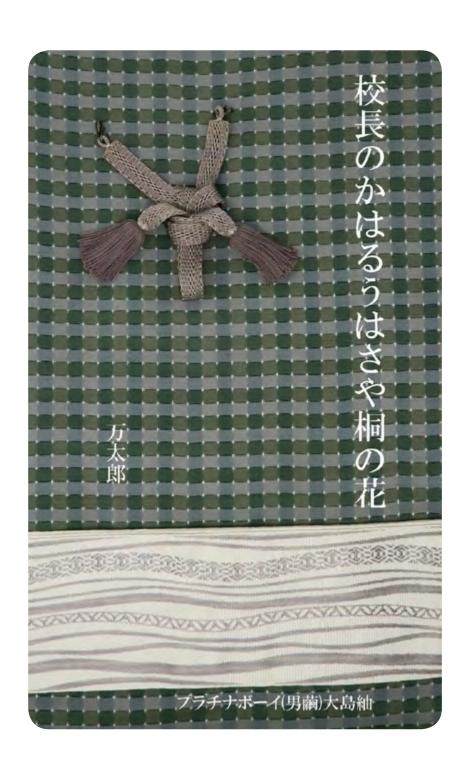
まって





五月

2

東京 佐藤 喜孝

ケチャ 花 核ボタン持ったあなたはあら、 狩や 鳴くや逝きたる人とけんくゎ 裏剣を ップのプシュ 口 の 折 あ れ ば たりを 當 ッと果てし花の て たき春の ほとびらせ 7

秋川

埼玉

雉

鳴

け

り

す

草

原

大

凧があは

ち

ぼ

な

今その時に

春

O

雷

り

0)

深

き 子

き 子

Ł

め

り

窓辺

にかかる花ミモ

ザ

土やはしぷくぷく芽を出すチューリップ

泉



理和

散 結 花 眩 る花や兄の しさや透きとほるほど女子高 見 雨 0) 酒 夜 の 話と合はせ 留 守 献 骨揚げ済ませを 電 立決 め 0) 兄 て 0) を 逝 生 り り < り

埼玉 大日向幸江

長閑か

長 閑けきやときどきしやべる鸚哥かな きくき 入 り め 0) ۳_ 緑 夜 を 起きる茶室 に 鳴き 馴 染 0) 継 悪 ぐ む い B B 黒 豆 御 草 羽 0) O

千葉 黒澤 佳子

日向ぼこ

ピ 春 赤 丸 丸 いく と 言 ギ と 出 B を クと繩跳びねだる男の は 窓 ず 1 に ル 朝 猫 漕 焼 食 B 0) 靴 日 真 向 春 ぼ 新 Z 子 l む

東京七郎衛門吉保

春兆す

兜 色 大 うちょきぱ 太去 ゆ 子 () り る 等 7 今 も 散 0) 花 つ じと 0) 7 道 花 ŧ 白さか 0) III 庭 0) な 主 び 上 す

花冷

水 浅 花 花 ットシ 冷 上 草 や バ B に ス ョップの猫寝てば 客 船 を 前 の 引 く 乗 船 り 底 に 車 か ガ 抱 夫 ツ \sim き や る と 若 か 花 浜 り梅 花 き 離 0) 0) σ 宮 冷 冷パ

石川 定梶じょう

ハンカチー枚

何 こ を繋ぎし末黒野に立つ 寒 たたか 5 か な 足 更 て に 地 ゐ *)* \ 分 駄 る ンカチ 校 B 駆 う 跡 け 一枚だけ干さる だ で 焼け す 月 木 音 ぼ お 瓜 0) つく 赤 ろ < S 7

埼玉 須賀 敏子

三月や

桜 抜 くと決め 度良 作りの ま じ 島 0) 玉 い 君と 権 歯 か 医者 丹 5 現 0) 餅 島 距 \sim 春 向かる花 離 0) 0) 船 ょ 句 長 草 会 か さ 0) 0) 雨 餅ん な な

埼玉 竹内 弘子

紙

ヒコー 中 白 花 き 臍 恋 丰 とばしてみたり暑気中 足 0) 水 重 古 泡た な 木 な 拝 ぼ り ま を ŋ に 5 る つ り む ぐ り る

薄

水水幣

春の寺

灯知猫入搔 ほ ぬ り 間 に つ もら 杏 O花 散 遺 咲 り 縁い の午 下 后 瓶 京

三重 長崎 桂マ

仲春

花 白 仲 仲 を 待 春の みどりやは 0) つ 具 す 高 らか 繰 青 な り な昼木の芽張 出 す 恵 春 樹 比 り 0) 寿 勢 顔

東京森なほ子

早 春

白デ春 ユ きのたふ或る エットをしてゐる烏日永 0) 0) の羽生結 が あ 日ある時親 0) 弦や花 ッ 場 ク L れ 夷 な ŧ

赤座 典子

花見

垂あ手 れど 0) け に 日 な た に 色 戻 人りぬと 伝へを放てり緋桃 を 白 に き 妖 会 気 ふ 花 か桜 な 狩 <



前月抄

道 行 は を み な さ き だ 7 梅 \mathcal{O} 雪 佐 藤 喜 孝

高 位 級 と 名 乗 る 陣 営 冴 返 る 赤

座 典 子

春 0) 星 数 \sim な が 5 に 葱 を 抜

秋 \prod

泉

紫 に 色 変 \sim ゆ き 7 春 \mathcal{O} Ш

石 森 理

和

雪

降

れ

り

ず

h

ず

h

上

 \sim

昇

る

様

自 家 製 と メ モ 入 り モ ン 拳 大 黒

大日向幸江

月 Ł か ま くら溶 け め 底 \mathcal{O} 冷 七郎衛門吉保

と

澤 佳 子

喜孝抄

寒

明

<

る

塩

壺

 \mathcal{O}

塩

底

を

つ

き

森

な

ほ

子

鈴

鹿

峰

暁

に

照

り

映

ゆ

春

近

L

長

崎

桂

子

土

濡

れ

ゆ

今

り

出

せ

L

春

霙

 \coprod

中

藤

穂

棒

杭

に

紅

絹

 \mathcal{O}

か

か

れ

る

雪

解

 \prod

竹

内

弘

子

春

光

B

深

<

Z

か

あ

胸

 \mathcal{O}

内

須

賀

敏

子

建

玉

O

日

B

す

り

Z

木

と

擂

鉢

と

定梶じょ

う

自

転

車

を

外

股

で

漕

ぐ

春

隣

篠

田

純

子







13

まっすぐで迷路でありし初昔

佐藤 喜孝

年が始まるのですね。(なほ子) をはじめます。しかし人間の行く道は曲がりくねった迷路、正解はどちらの道かと迷いながら、また1をはじめます。しかし人間の行く道は曲がりくねっす。地球の軌道はまっすぐに狂いなく、1年の歩みす。

渋滞の只中よりの初電話 森 なほ子

初日の出を観るドライブにお出かけになったので 初日の出を観るドライブにお出かけになったので 初日の出を観るドライブにお出かけになったので

数へ日の鴎と会ひしひと日なり 山荘 慶子

いました。(なほ子) 気ぜわし い年の瀬、用事で出かけた先でのこと 気ぜわし い年の瀬、用事で出かけたのか。数

年玉の礼ぼそぼそと受験生 赤座 典子

ぼそと。しっかり様子がみえますね。(なほ子)れど、めでたさも中くらいの身、照れもあってぼそれど、めばたさも正月は来ます。お年玉はうれしいけ

七キロの大根飾り道の駅 秋川 泉

1.5キロでした。7キロってどんな大根?桜島大根なちょうど立派な大根があったので、測ってみたら

き留めました。「飾り」の語がきいています。(なほ子)寄った道の駅で出会った巨大な大根、驚きを早速書らそのくらいはある でしょうか。 旅の途中で立ち

去年より三株殖えをり水仙花 石森 理和

水仙のかおりがいっぱいにひろがりました。(泉)な花。慈しんで去年植え花の頃を待っていらした今。「水仙花」と題した中の一句。 作者の最もお好き

春風やペダル漕ぐ靴新しく 黒澤 佳子

のでしょう。(泉) 快にペダルを漕いでさてどちらへお出かけになった 咲きはじめて新しい素敵な靴でのサイクリング。軽

四歳に忖度なしのカルタとり 七郎衛門吉保

作者は今の世の中に取り沙汰されている「忖

月そのものですね(泉)が!。かわいらしい方とのカルタとりはお幸せな正度」と云う言葉をこんな風に楽しく用いられてさす

銀座路地もっさりとした嫁が君 篠田 純子

ではいるから出るのだと逆に目出度いことと捉え関西ではるから出るのだと逆に目出度いことと捉え関西ではでた。その鼠が銀座の路地裏に。もっさりという表でた。その鼠が銀座の路地裏にがあった心地がある。(泉)

ポストなど掘りだしてあり深雪晴 定梶じょう

いる心持ちが致します。(泉)に掘り出す。まるで物語の世界を作者と共に歩んで深々とした雪の中に埋もれていたポストを晴れた日深のでした雪の中に埋もれていたポストを晴れた日

竹林に椋鳥の塒や冬満月

須賀 敏子

空にはもう冬の満月が静かに上がっています。 賑やかに大騒ぎしていましたが、今は竹林にようや の眠りをみまもっているよう。 収まって、 夕方ねぐらに戻って来た椋鳥の群れ うそのような静けさです。 (なほ子) が、 暗くなった 鳴き声も 椋鳥

小豆粥忘れて過ぎてしまひけり 田中 藤穂

経って、 はない ら…と気づいた作者。 後で一年の邪気を祓いましょうと召し上ったので 正月 でしょうか。 はあわただし しまふもの。 士五. 泉 さて美味しい小豆粥をゆっく 日が過ぎてしまった事にあ 月は気づかぬうちに日が

冴え返る星を仰ぎて雨戸引く 長崎 桂子

早春の 日暮れは急に冷え込んできて、 雨戸締め

> す。 ます。 ます。 の季語がよく効いていて、 に立ちます。 お会いしたこともない作者も懐かしく感じられ 何気ない日常のワンシー (なほ子) ふと見上げるともう春の星が輝いて 懐かしさを覚える句で ンですが、 冴え返る 1



あをキ ワ Ė٦ 俳句辞典 (ななー なに

春風に山羊顎ひげを靡かせるコスモスや風に靡いてしなやかま天をゆるりゆるりと靡く春は天をかるりのるりとなった。 九条や靡かぬもの 一葉折つて掲ぐ弔佐 にの ごと摩 き かに h 早長佐佐定崎崎藤藤梶

泰桂 江子

カタカナの名札溢るる新葡萄草の名札一々読みて春の池花いまだ名札万葉の菖蒲田よ 郎藤田関 衛野中口

寿藤ゆ子穂き

七郎 佐藤 門吉保 恭子

魚河岸や鍋釜もあり柚子もあり の目の蟻の早出やナフタリン

鍋薬缶瓦

開冷し鍋にひと口つぎにけり 開冷し鍋にひと口つぎにけり 大鍋を河原に運ぶ薄紅葉 ひとり居の鍋の焦げぐせ降誕祭 を対けるさい大鍋に茹でた路 お帰りなさい大鍋に茹でた路 お帰りなさい大鍋に茹でた路 燗冷し

> に鍋 恋ふ まてMin に か時季と思ひけり いままの鍋茶碗 しままの鍋茶碗

じょう

恭喜 子孝

無底の小さくなりした無関うて日當たるさざん花をあるく場買うて日當たるさざん花をあるく大豆や手鍋をさげた夕心大豆や手鍋をさげた夕心 場まつ小さくなりし牡蠣掬ふ星とんで鍋の蜆のつぶやける 一番 () 土鍋にて卵雑炊

土数愛鍋へ餐 鍋釜や逝きたる棚に冬日さ 調煮の大日の鍋 と **大根飴色蓋取れば** 神はとろ火に季寄せかな レー大鍋薄暑かな

伸次から次へ冬の草花猫から貰ふ生欠伸

名前

東 乗 乗 巻林多枝子 参える 参える 参える を まづ 路地うらををんな名前の春泥を踏み赤ちゃんの名!

の男猫の

篠田中

純藤子穂

竹須 内賀

弘敏^並志 子子未づ

斯台磨く心太 **発芽米** 須賀 山荘 慶子 定梶じょう 和 報子 佐藤赤東定赤長斉渡早藤野座 梶座崎藤邉崎 東芝 亜 喜寿典孝子子 尚子 よ典子 佳敏 子子 友七

東佐藤 亜 恭子

17



佐藤喜孝

須賀 敏子

三月に勿忘草を求めけり秩父路の桜吹雪や兜太亡く

出て来ないのが残念である。
作者には深い念ひがあるとおもふのだが、句の表面までの花言葉は「私を忘れないで」「真実の友情」とあった。「三月に」にだういふ意味を託したのか。わすれなぐさ」

春の空竜の形に雲動く

大きな画布である。
大きな雲が竜のごとき形や動きをしてゐたのだと思

いときの句を思ひ出す。 このやうな雲の句を読むと反射的に石森理和さんの若

大亀がふはふは消えし夏の雲鹿も猿も流れてゆけり羊雲秋の雲鳳凰飛び立つ筑波山

石森 理和

田中 藤穂

茶舗過ぎてカツ揚げる店鳥曇北 枕 西 面 に 寝 て 花 の 雨春 めき ぬ 門前 町の 人通り

毎日の鞄小脇に鳥曇 富安 風生

定梶じょう

晴天の切なく目刺干されけり顔細る木の芽起しの雷聞いて

しいことだとおもふ。 ことばで説明するのは難 ことばで作られてゐる俳句をことばで説明するのは難

句会後の談論禁止底紅忌 後藤比奈夫

に愉しんでゐた。 わたしはこの比奈夫句と正反対なことを句会後酒と共

ることばだけが印象に残ることがある。
へて暫くすると「切なく」だけがのこる。俳句の中のあい。目刺も自分用に少量干されてゐるのがよい。読み終于されてゐる目刺が切ないのかは深く詮索しない方がよてください、と投げ出したくなる。晴天が切ないのか、ることばだけが印象に残ることがある。

ひたむきと言ふは切なし秋海棠 ・ 斉田 綾子切なさは鴬餅のかたちかな ・ 八田 木枯

祝儀の辞下手であたたかなれば聴く

でも珍しい見合結婚。きっかけがさうだったからかお節 この句を読み思ひ出したことがある。妻とはその当時

介を夫婦でした。その中で結納まで行き大の苦手な挨拶介を夫婦でした。その中で結納まで行き大の苦手な挨拶介を夫婦でした。その口上もお嫁さんのご両親はきっと掲句ののだ。わたしの口上もお嫁さんのご両親はきっと掲句ののだ。わたしの口上もお嫁さんのご両親はきっと掲句ののだ。わたしの口上もお嫁さんのご両親はきっと掲句のかうなお気持ちで聞いていただいたと思ふこともものではあまで行き大の苦手な挨拶介を夫婦でした。その中で結納まで行き大の苦手な挨拶介を夫婦でした。

石森 理和

アネモネの花弁数へ百枚にアネモネの日増しに開き大輪に

事な花が咲いたやうだ。花と対話し、それを纏める。俳な手上げの花の姿である。しかしことばの響きは日本はお手上げの花の姿である。しかしことばの響きは日本はお手上げの花の姿である。しかしことばの響きは日本に対している。調べたら花ビラの数も色もさまざま、花音痴にアネモネの花、見てはゐるのだらうが知らないといっアネモネの花、見てはゐるのだらうが知らないといっ

合ひの農家二軒の日向ぼこ

惹きつけるものがあった。そしてわたしも惹きつけられ 家が日向ぼこをしてゐるやうだといふ。理和さんの心を き物がすること。掲句は肩寄せ合ふやうに在る二軒の農 日向ぼこをするのは人間、いや犬、猫、天道虫など生

篠田

ストレスの無きもストレス地虫出づ 花冷やかつて川なる高速路

みのない清らかな月の世界へ帰れますよ、と月の世界の 畑勲監督の「かぐや姫物語」の、月へ帰るかぐや姫が悩 のテーマと合っておもしろい。この文章を書いてゐて高 のあることを知った。、地虫出づ、のモゾモゾ感が作品 決する、その行為こそが生き甲斐といふ前向きな人生観 人に云はれいはれる。 純子さんにはストレスは人生の薬味?。ストレスを解 反論しつつも羽衣を着せられ地球

> 純子さんはさしずめかぐや姫の役である。 の記憶がなくなってしまうラストシーンを見たところ。

アネモネの活けある夕餉離職の日

アネモネは花の色によりそれぞれ花言葉がある。 活けてしまへ。 食卓に飾られたのは何色だったのだらう。えーい、 を愛す。白は真実、期待、希望。紫はあなたを信じて待つ。 理和さんに続いてのアネモネ。 花言葉を調べてみた。

20

害に難儀と暮らし蜆 り居も 少し華や ・ぐ雛納めらし蜆汁

るならばうなづけるが、雛納めは普通淋しさがつきまと とつひつひ多弁になってゐることに気づく。掲句、 ふものだ。が、 人が増えてゐるときく。わたしもそのひとり。人にあふ い。連れ合ひと別れたり、子どもと離れて暮らす独居老 〝独り居〟には若者の独り住まひのイメージは湧かな 作者はそれでも暮らしの中での華やぎと

の淋しさである。いる。少しといひ 少しといひ華やぐといひつつ、ふと感じた独り居

庭 仕事僅 かに過ぎて 黄 水

たことに気がついた。 尽きない。その様な作業をしてゐて、黄水仙を通りすぎ が明るく咲いてゐた。 庭の草を抜いたり花柄を取り除いたりと結構庭仕事は 難しい句であった。 的外れな鑑賞になるやもしれぬ。 振り向くときりっとした黄色の花

大日向幸江

雨父 蛙遠く離れの日と母の日の あり鯉幟 た 娘

姿より雨蛙の声が聞こえる。 口語の が離れたが の乾い

た表現がよい。

水田に小 さな 笑窪穀雨 か

ても、 始鳴・蚯蚓出・竹笋生とある。 く晩春から初夏にかけてのことばである。雨が降ってゐ 穀雨は二十四節季の一つで、清明・穀雨・立夏とつづ 晴れてゐても穀雨である。 このやうに生物の活動が 穀雨の次の立夏では蛙

> 田の面になんの因であるかわからぬが小さな笑窪を見付 顕著になる前触れであらうか。穀雨の頃、水を張られた けた作者である。

石動

山なかの宿は辛夷の夜明け かな

ゐた。

緑中白一点の辛夷の白さは際だってゐる。

「夜明 りの挨拶である。 けかな」といふおほらかな読みぶりに旅の一日のはじま たしは朝食前に宿の周りを散策することを楽しみにして 宿泊先の夜明けは異界への幕開け。 期待が膨らむ。

芭蕉は辛夷の花に興味がなかったやうだ。 夜明けの辛夷は一段とよろしく思った。旅に明け暮れ た青空といふワンパターン、 辛夷の花は好きな花であるが、背景はいつの澄み切っ いかがなものかとおもふが

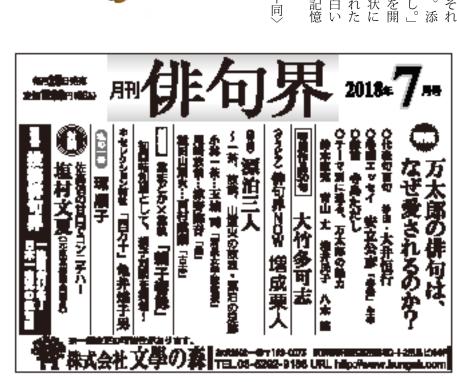
月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿 芭

井上石動さんはこの句へ添書きを付けられた。 信濃原村雪解雫は椅子を打ち 来 て の 吾の桜か

卓と白い椅子。パイプを咥へて雨と夏椿を愉しんだ記憶 板張り、そこに回りの緑が映え清々しい。軒下には白い 貼ってあった。テラスと云ふのであらふか、 けて外へ出ると土やコンクリではなく板が簀の子状に 書きは「長野県茅野市原(はら)村=ペンション多し。」 以上に想像の翼をひろげられないのは残念であった。 がこの句から蘇った。 としては視野が狭められてしまひ、 蓼科のペンションに泊まったことがあった。ドアを開 一種の金縛り。 雨に濡れた それ 添

〈順不同〉





あをキーワ Ė٦ 俳句辞典二 (なまー なみ

薔薇園にユトリロ・ルノワール梅雨の小川注ぐ川にも名前な国展に知人の名前桐の花 ビアホ 囀や剪定の枝生々し 生菓子にロシヤン・ティしてうららけし **生菓子** 藁塚の名前を呼ばん山も暮れ 大旦生傷ひとつつくり 大雪に生木の裂けのとどまらず 生煮え 生木 生々し 生傷 ル枝豆がひとつ生煮え の名前 竹早芝森佐鈴佐松 内崎宮山藤木多 張本 弘泰磨り恭枝子 弘子こ子 佐藤 喜孝 定梶じょう 定根じょう 佐藤 長崎 石森 大日向幸江 定梶じょう 恭子 理和 桂子 船頭の訛やさしく鮎料理 をはらかな訛と巡る冬の加賀 夏の道近付いて来る国訛 さらばとて老鶯のケキョ国訛 青りんご耳にあまゆる国訛 所審日訛る鴉のかへり来る 門部る透きっ歯からは江戸訛 青田波遥かかすみてビルの像 大学でである。 一学のではいる。 一述のではいる。 一述のでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのででは、 一でのでは、 一でのでで、 一でのでは、 一でのでは、 一でのでは、 一でのででは、 一でのでで、 一でのでで、 一でのでは、 一でので 妬情一途石鳴らし引く冬の秋霖や土塀に波の跡留む岩を噛み翻筋斗打つ波春崩 の音近 日き海まで続く千枚田田波遥かかすみてビルの蟹を追ひかけ波に捕われの音近くなり来る五月関 の訛やさしく鮎料理にもぬくもりありてさくらんぼ 打つ波春嵐 冬の

米 人 悦 子 恵 子

七郎衛門吉保

佐佐竹堀鈴 藤内内木 多 恭恭弘一村子

0)

典さ

のれ闇

像ぬ

石長田篠関須鈴早栢松鎌| 森崎中田口賀木崎森本倉房 多 理桂藤純ゆ敏枝泰定米久 和子穂子き子子江男子恵

友理桂藤純ゆ敏 七和子穂子き子

波

ベ か 銅 11 *7* \ ぎろ 鑼 口 口 ナ ひ 灣 ン ン て 4 湾 湾 旅 戦 0) 禍 拳 墨 立 0) 色 を 骨 見 つ え 0) 零 も 船 ぬ 稲 フ あ L 8 田 エ・ 7 春 ŋ ダナ 大 岩 0) 期 朧 波 作 霞

春 花 蓮 丸 ベ ア 才 蓮 池 粛 ζ コ ザ に 潭 1 0) 見 ン は とメ 竜 بح ゆ 王 日 云 天 コ 南 朝 は 本 ン に れ 統 シ 料 デ 登 L 治 ル 理 ナ 民 る タ 0 に 故 海 بح 横 残 春 春 遠 宮 に ŋ 0) 日

虹

霞

九

份

0)

お

茶

٢

ラ

ン

タ

ン

春

時

雨

亀

鵙

に

似

7

衛

兵

0)

忠

烈

祠

虎

花

院

位度

秋めきし夏草今年の戦了ゆ

ける所まで行ってしまう。 などなかったかのような、夏草も栄養水を補給するとれなどなかったかのような、夏草も栄養水を補給するとえばくたくたに疲れたあとの冷えたビールを飲みおえ疲しまう。とくに雨が降った翌日の夕方などは、人間で言しまう。とくに雨が降った翌日の夕方などは、人間で言いる所まで行ってしまう。

イラクへの戦争。 時に人間が仕掛ける戦争と同じである。米が仕掛けた

大義名分であった「大量破壊兵器」の存在である。そ

う」と………。 兵器は存在しなかった。今後も兵器は出てこないであろの存在も、パウエル国務長官発表「イラクには大量破壊

ものか。
ものか。
ちのかの
ものかの
は性者はいたしかたないと言えるかもしれないが、その
様性者はいたしかたないと言えるかもしれないが、その
ものか。
仕掛けた国

しまう。と、、人間はいけないところまで時間に関係なく行って

をひろげてゆくが、季節が変るとさっさと撤退してしま夏草は、ほかの草や花を枯らしても自分の繁茂の範囲

こが人間と違うところである。

| 教受してハる犬態を畳敷なこれば「我」と永ん:| 雑草といえど可愛いいものがいっぱいある。

思える。
思える。
繁茂している状態を過激なことば「戦」と詠んだとこ

小兔を商うてるらし秋燈

客さんと大道の主人とのかけ合いも面白かった。とこれサービスしとくから買っていかない。それじゃあ、これサービスしとくから買っていかない。それじゃあ、これ暫くそのものを見ていたりもした。「そこのお母さん、暫くそのものを見ていたりもした。「そこのお母さん、暫くでしているいので見た。物があまりなかったせいかも私の小さい頃はよく大道で茣蓙をひいていろいろな物

買ったりした事も遠い昔のことになってしまった。お祭などで屋台が出て、ハッカパイプや金太郎飴を

のである。と言う事は、看板が出ていないお店か大道でこの句は「兎を商ふてるらし」と兎と断定していない

の店のようだ。

最近ではあまり見なくなったが新宿歌舞伎町の大道 で、ヒヨコを売っていた。狭い箱のなかにつめこまれて で、ヒヨコを売っていた。たらんが為に手にのせて見ている 人の前に突きだして見せた。ヒヨコは可愛いのだが、哀 れであった。そんな物売には珍しいので人だかりができ る。だんだん集ってきて大きな輪になってしまう。人間 の本能がそうさせるのか、見えないものはどうしても見 たくなる。背伸びをしてもとび上がっても見えない時は 見えないのである。商ふてるらしと言っているので、自 分では目にしてない事が分る。せめて何があるのかだけ でも確かめたいと思うのが本筋だろうか。

人もそう答えたのかもしれない。と聞いてしまった。「小兎らしいですよ」と聞かれた「何があるんですか」と前に覗き込んでいる人にとう

秋の灯火と可愛い小うさぎの取り合せが妙である。

あとがき

蛙は井戸に棲めるか。

といふことばもあるさうだ。井戸の中に棲む蛙と ゐたことを書いた。その間違えの因の一つに「井 なかった。 議に思った。辞書でもネットでも井蛙は見つから のこと。井戸の中で蛙は棲めるのだらうか、不思 びつけてしまったのではないかと思った。「井蛙」 の中の蛙大海を知らず」といふ諺が井戸と蛙と結 前月のあとがきで古池を井戸と間違へて覚えて

手作りの本

に負へないので四月号から表紙だけ印刷所にお願 と思ったらプリンターの色がおかしくなった。手 台目と全く同じ型番のプリンターをオークション ひした。これも精神衛生上よろしい。暫くプリン で探した。お陰でストレスがいささか解消した。 それを補うべくプリンターを二台体制にした。 「あを」は手作り。遅刊の9%はわたしの遅筆。

> 未さんのカットは改善するまでご猶予を願ひしま ゐる。それまで七郎衛門吉保さんの扉作品と東亜 ターのメンテナンスを行えば復帰すると甘く見て

大日向幸江 御厚志多謝

二〇一八年五月号 発行日 電話 ま ま ま す 090 9828 4244 四月二十四日 四月二十四日

カット/松村美智子・福井美佐子・ティリ印刷・製本・レイアウト

ゆうちょ銀行(普)(店番 018) 会費 一〇〇〇CE 佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ) 4 5 8 6 4 0 2